



源氏物語

中野幸一◆丸谷才一

新 潮 古 典 文 学 ア ル バ

源氏物語

中野幸一◆丸谷才一

執筆 中野幸一
セイ 丸谷才一

資料提供協力者

齊藤武司 佐野善之 藤園堂書店 伊藤圭太 富江保 中野幸一 古井戸秀夫 松森務 安田建一 与謝野光 宮内庁書陵部 五島美術館

浄土寺 静嘉堂文库 中央公論美術出版 徳川美術館 名古屋市 蓬左文库 藤田美術館 前田育徳会 尊経閣文库 陽明文庫 早稲田大学 演劇博物館

写真撮影

小嶋三樹 くめたかし 榊原和夫 清水寛 田中正夫 道正太郎 野中昭夫 松藤庄平 名鏡勝朗 飛鳥園 坂本万七 写真研究所



新潮古典文学アルバム 8
源氏物語 げんじものがたり

一九九〇年三月五日印刷
一九九〇年三月一日発行

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(業務部) 03-266-5111

(編集部) 03-266-5411

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 加藤製本株式会社

*価格はカバーに表示してあります

乱丁・落丁本は、御面倒ですが、小社通信係宛
御送付下さい。送料小社負担にてお取り替え
いたします。
無断転載を禁ず。

後朝

丸谷才一 2

享受と伝来

83

源氏物語

中野幸一 9

源氏物語年表

中野幸一

104

『源氏物語』への誘いいざな

10

関連作品

109

『源氏物語』の世界

源氏物語を読むための本

111

I 青春の恋と憂愁

17

(桐壺く花散里)

II 落魄から栄達へ

29

(須磨く乙女)

III こよなき栄華の日々

41

(玉鬘く藤裏葉)

IV 罪の応報と孤愁の影

49

(若菜上く幻)

V 宿命の宇治の人々

61

(匂宮く夢浮橋)

紫式部とその周辺

73

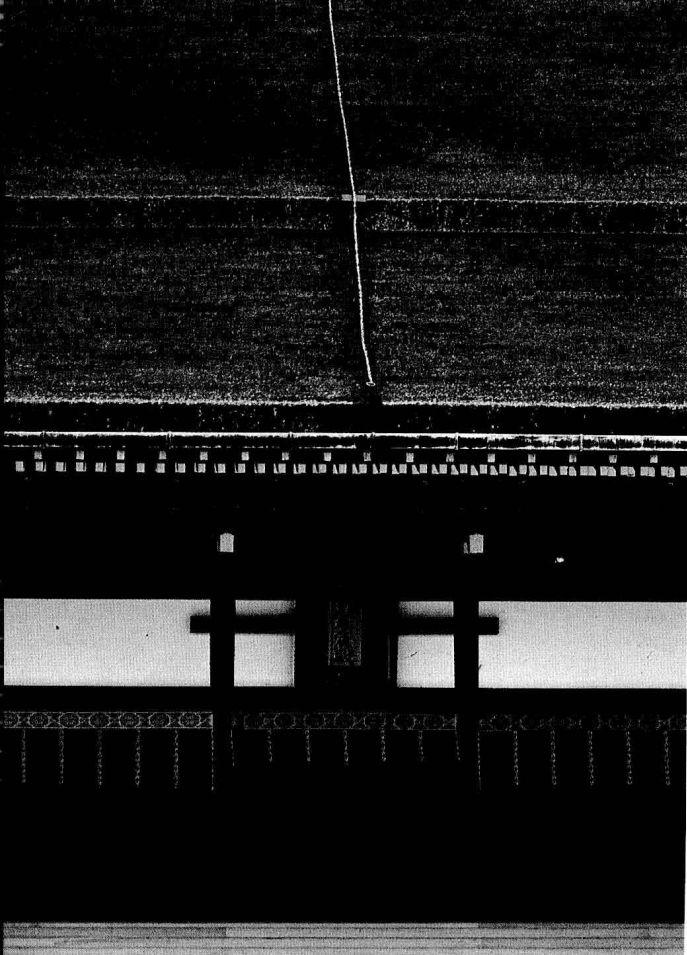
編集 木挽社

カバー絵 Ⅱ『源氏物語絵巻』より「柏木三」(徳川美術館蔵)

源氏物語

中野幸一

丸谷才一



京都御所紫宸殿正面

後朝きぬぎぬ

丸谷才一

『源氏物語』夕顔。十七歳の年の秋、光源氏は久しぶりに六条の御息所を訪ね、一夜をすごす。御息所は二十四歳である。

霧の濃い朝、源氏の君は御息所の侍女に何度もせき立てられ、眠さうな様子で、嘆き嘆き帰ることになる。(帰るところを人目につかぬやうにするのが作法。)中將といふ侍女が格子をあげて、お見送りなさいませといふ気持らしく几帳をずらしたので、女君は頭をもたげて視線を外に向ける。植込みが色とりどりに咲き乱れてゐるのを素通りしかねてたらずむ源氏の君の姿は比類のない美しさである。車に乗るため中門廊へゆかうとすると、中將が見送りに来る。紫苑うばぎいろの表着に薄絹の裳を結んだ腰がなまめかしい。源氏の君は振り返つて、御息所の位置からは見えない、外側の欄干に中將を坐らせ、じつとみつめて、



『百人一首画帖』より「紫式部」

咲く花に

心が移ると

言はれるのは心外だが

折らずに過ぎるのは辛い

今朝の朝顔

「さてどうしたものか」と手を取ると、中將はいかにも馴れた態度で、

朝霧の

晴れるのも待たず

お立ちとは

花には

気のないらしい様子

と、女主人の代りといふ心で返歌を詠む。

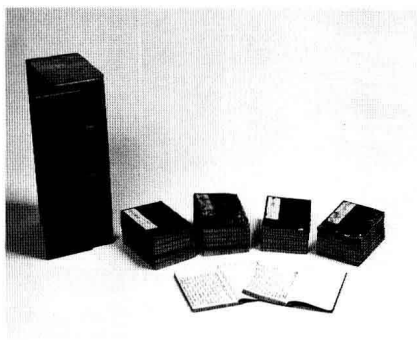
大野晋さんと二人でおこなった『源氏物語』輪読のとき（これをまとめたのが『光る源氏の物語』上下）、このくだりで、大野さんから問ひ詰められ、わからなくて困った。

大野 光源氏は眠たそうな顔で六条御息所のところから帰ろうと

しました。この先のところ、「中將のおもと御格子ひとま一間上げて、



京都下鴨神社境内で催される蹴鞠



与謝野晶子が現代語訳した時に座右において読んでいた『源氏物語』の写本

『見たてまつり送り給へ』とおぼしく御几帳ひきやりたれば。そこ、どうですか。

丸谷 どうですかって……。

大野 中将の御許は、六条御息所に向つて御格子を一間上げて。

丸谷 見送りなさいと言って、几帳を横にずらしたんでしよう？

大野 なのにな？

丸谷 「御髪もたげて見出し給へり」というのは、起き上がっただけだ。

ただけだ。

大野 そう。まだ、寝ているんですよ。これ、どういう意味ですか。

か。

丸谷 ……………。

大野 つまり、六条御息所の愛執が深いというのはこういうこと

でしょう。朝、起きられないんですよ。

丸谷 あ、そうか、ぐったりしていた。うーむ。

大野 起きられないから、彼女は頭を上げるだけで源氏を見送つ

たというんです。それほどであったのに、源氏はまた中将にちゃ

んとこれだけ働きかけるバイタリティーを有するということが皮

肉のように書いてある。

丸谷 おっしゃるとおりです。



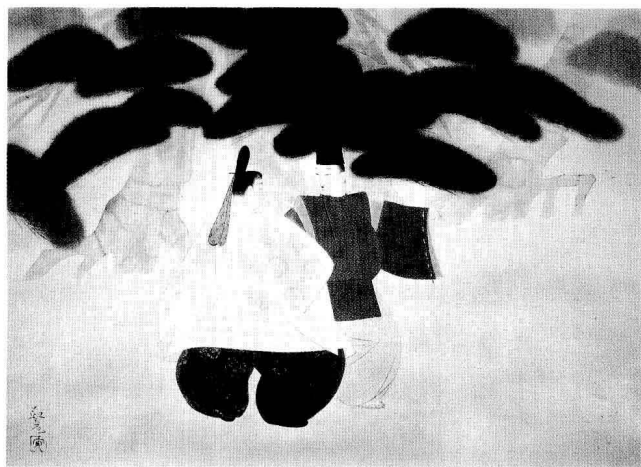
『源氏物語』五十四帖の巻名になぞらえた華道・源氏流の指南巻物

大野 「御髪もたげて見出だし給へり」、これだけで作者はその一晚を全部表現した。こういうところが時々あるんですね。

まるで、出来ない学生が演習でしごかれてゐる図で、写してゐて厭になるが、それでも敢へて書き写したのは、わたしの鈍感浅薄な読み方が在来の『源氏物語』解釈を代表してゐるからである。素人はもちろん玄人だつて、たいいていの現代日本人はわたしのやうな調子で読み、大事などころを見のがしてゐた。しかし作者は、なまなましい描写を行間でおこなつてゐて、それを当時の、おそらく百人もゐなかつたと思はれる読者たちはきれいに読み解き、しきりにおもしろがつた。それが近世以降、駄目になつたのである。

賀茂真淵が招かれて都で講義したとき、男女の仲のことがちつともわかつてないため、聴講の女中たちがくすくす笑つたといふ。国学者以前の古典研究者であつた室町時代の連歌師は、その点、真淵とは大違ひだつたはずである。彼らは、そして江戸時代の京の女中たちは、宮廷文化的な男女関係のなかに生きてゐたし、あるいはすくなくともそれを見聞きしてゐたから、いちいち理解が深かつたのであらう。『源氏』の読者は、儒教が支配的な江戸時代の態度や、その名残から抜けきらないこの百年間の妙に道学的な読み方を捨

安田靉彦画「須磨」



て、テクストに向ひ合はなければならない。

その際に大事なものは、王朝文化に含まれてゐる古代的な要素を見のがさないことである。本居宣長が「もののあはれ」と言ひ、折口信夫が「色ごのみ」と呼んだのは、実はそれだつたとわたしは思つてゐるが、儒仏二教の普及にもかかはらず、わが王朝文化には古代の恋愛習俗が不思議によく残つてゐて、それが『源氏』には最も鮮明に表現されてゐるのだつた。そこでは恋愛および色情が、儒仏二教を知つた者の眼から見るとじつにあつさり肯定されてゐるのである。

その古代的な価値観が端的にあらはれてゐるのは、『源氏』を貫く、零落した姫君を訪れる若君といふ説話の型だらう。これは光源氏と末摘花の説話にも、彼と若紫の説話にも、彼と明石の上の説話にも（いや、見方によつては彼と女三の宮の説話にも）、そして匂宮および薫と宇治の姫君たちの説話にもあるもので、『源氏』全体がこれを複雑に組合せることで出来あがつてゐると言へる。もともこの型の説話は、『竹取物語』その他におびただしい、平安朝の基本的な説話だつたが、その底には何か神話的な刷りこみがあつたに相違ない。スサノヲが怪物を退治し、姫君を救ひ、王国を自分のものとする、あの説話もその一形態であるやうな神話である。折

「新版画合源氏双六」（豊国画）。江戸末期から明治にかけて、こうした双六が多くつくられた



口信夫は、天皇は後宮に納れた女たちの呪力によつて国を統治すると言つてゐたが、さういふ女たちを諸国に求めなければならぬから、たとへばヤマトタケルは遍歴をつづけたのだらう。そしてこの神話の彼方には、どうやら、母系家族的な太古があるらしい。

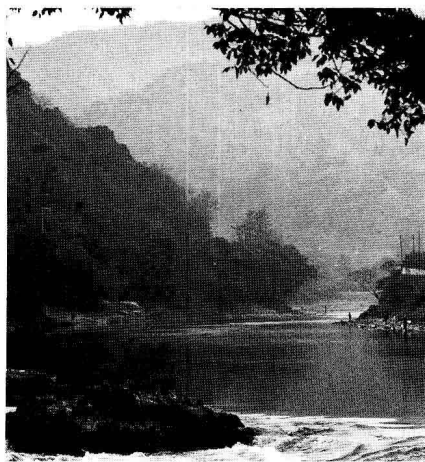
光源氏の生涯は、そのやうな古代的な価値が最後の光を放つ何十年かで、そして彼の死後は、その古代的価値がもはや失せてしまつた時代である。作者はその古代の終焉、あるいは神話の喪失を、われわれの眼前にじつに花やかにくりひろげてみせる。さうすること、一方では人類史を（日本史を、ではない）眺望し、他方では人生の種々相をくまなく研究するのである。

光源氏と六条御息所との後朝きんぎんに戻らう。あの箇所で不審なのは、房事の疲れでぐつたりしてゐる女主人を、侍女がなぜ無理に送らせるのかといふことである。もしそれが愛情の表現であるならば、御息所はもつと積極的に起きあがらなければをかしい。

かういふ疑問に対する答としては、古橋信孝の考へ方が有効である。彼は『古代の恋愛生活』のなかで、

朝戸出の君が姿をよく見ずて長き春日を恋ひや暮さむ

朝戸出の君が足結あゆひを濡らす露原はやく起き出でつつわれも裳裾濡

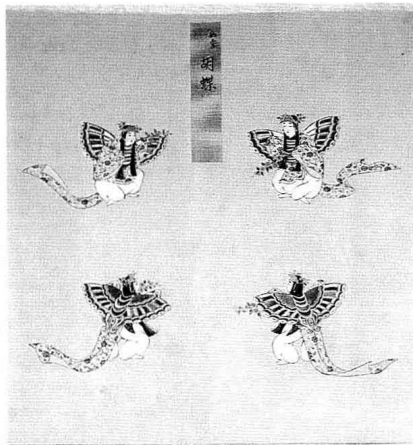


京都宇治川の流れ。浮舟はこの流れに身を投げようと一人宇治の山莊をぬけ出していったのだが……

らさな

などを『万葉集』から引きながら、女が送るのは、見送ることでも男が無事に家に着くやうに祈る呪的行為だった、と言つてゐる。その通りだらう。それは古代信仰の型で、その型が愛欲の激しさのあまり無視される。その冒瀆がまづ読者を興奮させ、次にその冒瀆を侍女の機転で救ふといふ事態が読者をほつとさせ、第三に、たつたいま貴婦人と別れたばかりの若君がその侍女を口説くといふ不謹慎な振舞ひが読者を興奮させ、最後に、その侍女の上手な方角が読者を安堵させる。古代呪術の名残りを紫式部はこんなに小説的に用ゐてゐるのである。

『舞楽図巻』より「春鶯囀」(右)と「胡蝶」





安田靉彦画「雪木」

源氏物語

中野幸一



『源氏物語』五十四帖巻名

- | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|---|---|
| 夏 | 22 | 玉 | 合 | 明 | 9 | 若 | 1 |
| 27 | 簀 | 18 | 松 | 石 | 葵 | 紫 | 桐 |
| 27 | 火 | 23 | 風 | 14 | 10 | 6 | 壺 |
| 28 | | 初 | 標 | 賢 | 末 | 2 | 帶 |
| 28 | 野 | 音 | 19 | 木 | 摘 | 2 | 木 |
| 29 | 分 | 24 | 薄 | 15 | 花 | 3 | 空 |
| 29 | 行 | 胡 | 雲 | 蓬 | 7 | 3 | 蟬 |
| 30 | 幸 | 蝶 | 20 | 生 | 紅 | 4 | 夕 |
| 30 | | 25 | 権 | 16 | 葉 | 4 | 顔 |
| | | 21 | 乙 | 17 | 賀 | 8 | |
| | | 26 | 女 | 17 | 花 | 8 | |
| | | 26 | 常 | 17 | 宴 | 5 | |
| | | | | 13 | | | |



『源氏物語』は、十一世紀の初頭に、紫式部というひとりの宮廷女房によって創作された。それは今からおよそ九九〇年ほど前のことで、世界的文豪のダンテやシェークスピアが世に出るはるか以前のことである。

『源氏物語』の規模は全五十四帖、四代^{じよう}の帝七十余年にわたり、登場人物は四百数十人、そのうち名のある主要人物だけでも優に五十人は超えるという一大長編物語である。これを四〇〇字詰原稿用紙に換算すれば、二千五百枚にも達する。

これほどの大部な作品であるから、その内容を把握するのも容易ではない。そこでまず物語全体の構成の大略を示しておこう。

『源氏物語』の構成

〔第一部〕「桐壺」―「藤裏葉」の三十三帖

(光源氏の華やかな前半生)

I 青春の恋と憂愁

(光源氏の生い立ちと青春の奔放な恋愛生活)

II 落魄から栄達へ

(流離の後帰京して栄達する過程)

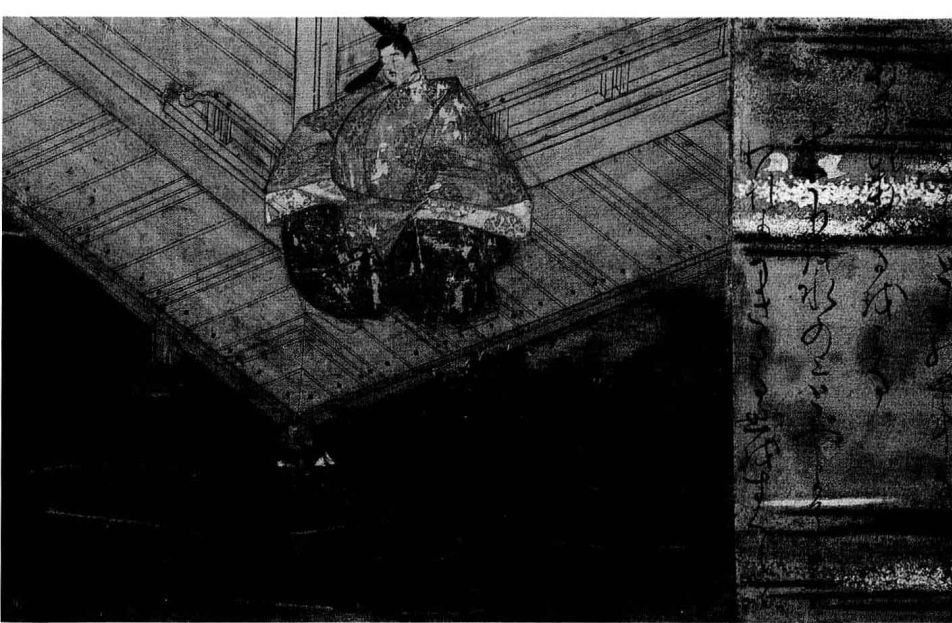


京都平安神宮の応天門。往時の平安京の応天門に模して造られている

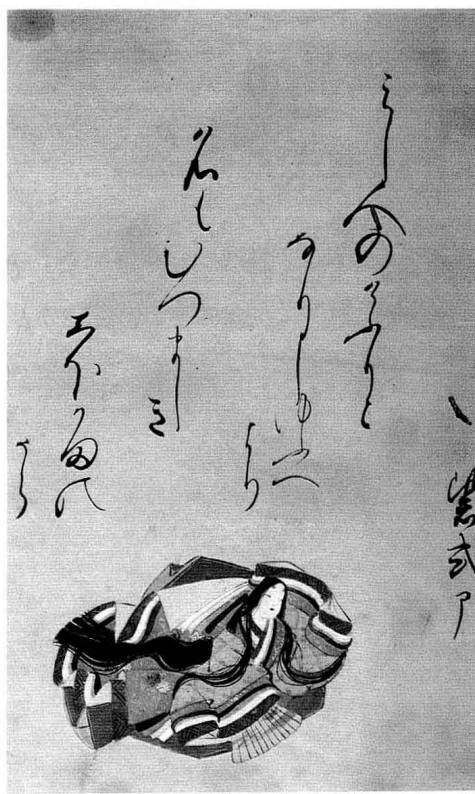
- | | | | | | | | |
|------|---------------------|-----|----|----|----|-----|----|
| 袴 | 31 | 真木柱 | 32 | 梅枝 | 33 | 藤裏葉 | 34 |
| 若菜上 | 35 | 若菜下 | 36 | 柏木 | 37 | 横笛 | 38 |
| 38 | 鈴虫 | 39 | 夕霧 | 40 | 御法 | 41 | 幻 |
| (雲隠) | へこの巻は古来巻名のみあつて本文はない | 42 | 匂宮 | 43 | 紅梅 | 44 | 竹 |
| 河 | 45 | 橋姫 | 46 | 椎本 | 47 | 総角 | 48 |
| 49 | 宿木 | 50 | 東屋 | 51 | 浮舟 | 52 | 蜻蛉 |
| 手習 | 54 | 夢浮橋 | | | | | |



四辻公理筆の『源氏物語系図』。
左より四人目の六條院とあるのは
光源氏のこと



『女房三十六歌仙』
 (後徳大寺実維筆)より
 「紫式部」



III こよなき栄華の日々

(六条院の理想的な栄華の世界)

〔第二部〕「若菜上」→「幻」の八帖

(光源氏の寂しい後半生)

IV 罪の応報と孤愁の影

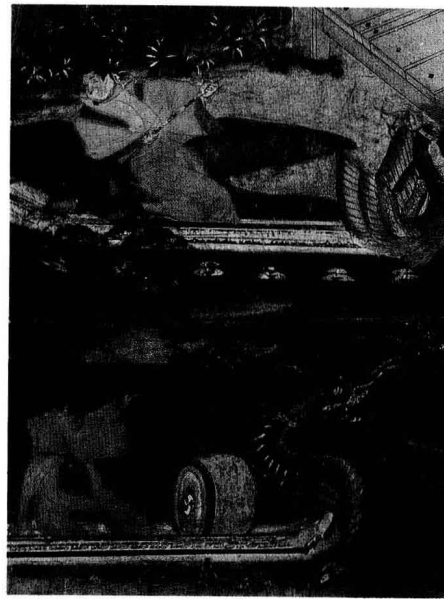
(若き日の罪過の応報におののくわび
 しい晩年の生活)

〔第三部〕「勾宮」→「夢浮橋」の十三帖

(光源氏亡き後の世界)

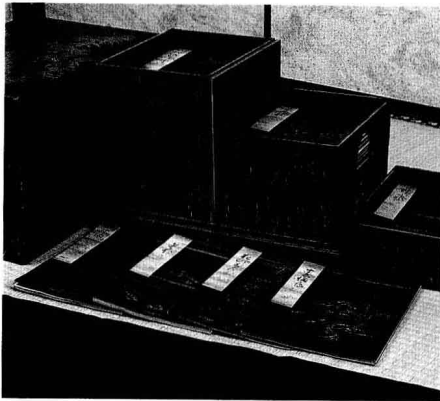
V 宿命の宇治の人々

(薫君・勾宮と宇治の姫君たちとの宿命
 的な恋愛)



『紫式部日記絵巻』より、竜頭鶴首（りゅうとうとうげきす）の船を見ている藤原道長（藤田美術館蔵）

江戸時代、公卿や大名の姫君が嫁ぐときに持参した嫁入本『源氏物語』。表紙に金泥で絵を描き、見返しは金箔、箱は金時絵の漆塗りである



右のように、『源氏物語』の構成は大きく三部に分けて考えるのが通説となっている。

第一部は「桐壺」から「藤裏葉」までの十三帖で、主として光源氏の華やかな前半生を描いた部分である。この部分は、さらに物語の展開に即して三つに分けることができる。すなわち、光源氏の生い立ちと、継母藤壺との過失を秘めつつ正妻葵上や紫上をはじめ空蟬・夕顔・末摘花・六条御息所・朧月夜・花散里等々の女性との関わりを描いた「桐壺」から「花散里」までの十一帖、政敵右大臣の姫君朧月夜との密会が露見し、よぎなく須磨に流離して明石上に出会い、帰京して昇進栄達の道を歩む「須磨」から「乙女」までの十帖、四町に四季の庭を配した理想的な大邸宅六条院に愛妻たちを住まわせ、自らは太上天皇に準ずるといふ特別な待遇を得て栄華を極める「玉鬘」から「藤裏葉」までの十二帖である。

第二部は「若菜上」から「幻」までの八帖で、主として光源氏の晩年の孤独で寂しい心境に焦点をあてている。朱雀院の女三宮の降嫁は、結果として最愛の妻紫上を病死に追いやり、またこの晩年の若妻と柏木との不義は、遠い若き日の藤壺との罪の応報として源氏の